唐太日記

下

ル 4
3691
2

門 ル4
號 3691
卷 2

早稲田大學圖書館
25.3.7
購求

本間文庫

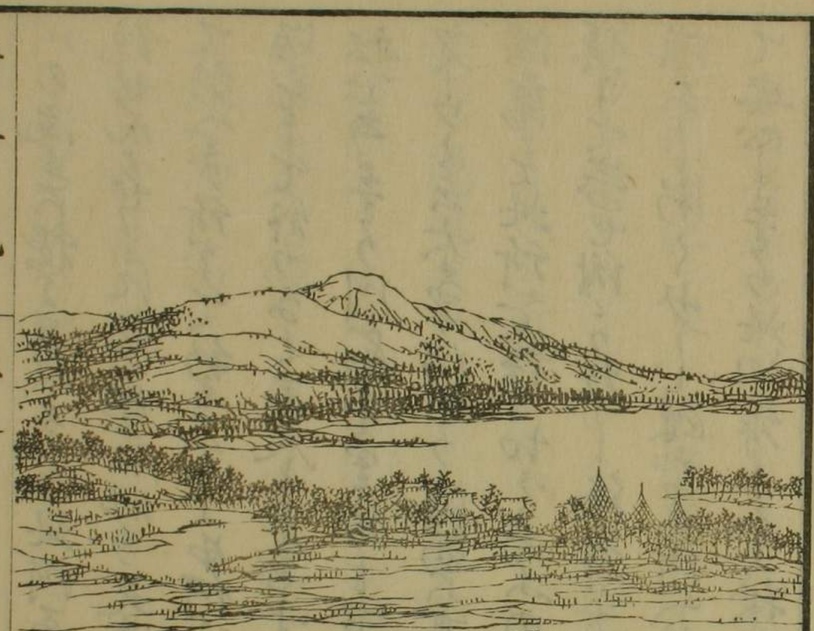
甲寅唐太日記卷之下

長氣志郎　松浦弘　評注

廿五日六月昨夜より引續き大風雨にて船波〻荒〻しく
あり早朝より起出旅装〻る甲斐なれし粮食を支〻らるを
待ちかねるとかく空〻く日を送るの思ひ中〻心苦〻しく
共船を出さるれい待ひ朝を彼ハ一叶のとつ〻ら米を粮と
也玄米にて粥を煮て食ふ〻ハ〻ら少〻苦味あれとも巻舟乃
如くにて風味雅あるものの中〻世間にとり白米ところ糧を
或ら之を特米の玄米を入也本紙制にて精ひ米を入米を是を

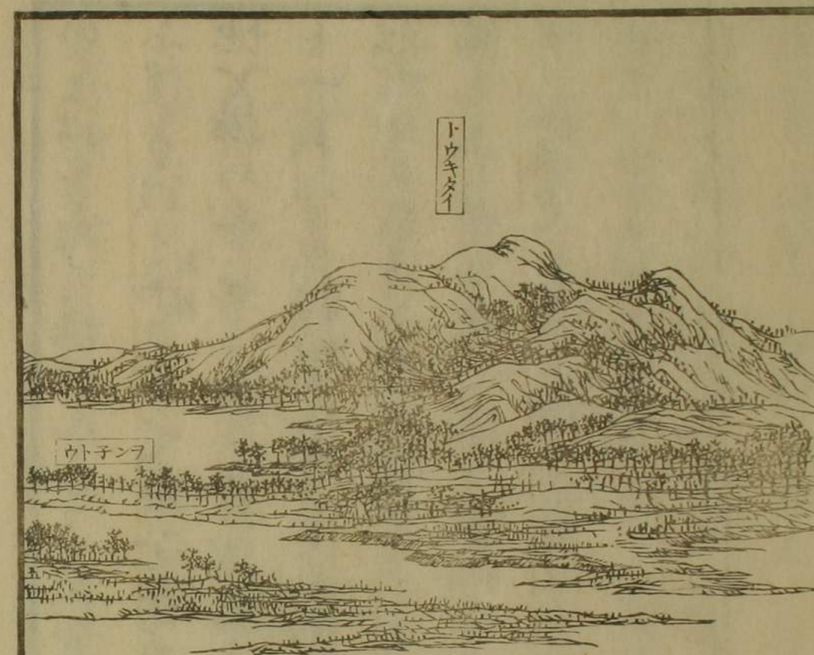
助けく揚きり總て夫家の不自由あること言語に堪へざるに
り出んとするく優物なし手伝ひ口噛んとするく盟ち
俗て奈良柄を例さ多り〜爲の方く水を入れて手洗ひ
まく嚙き〜きりまく火鉢とくる和な〜割き石の凹きり
火をのまきり
注此石ハルウタカの水源よりいるを出人等鮫漁よ上り生時と
割り而り亜諸方へ配分せるとのよ〜形り運上屋迄所の五
人等ハ適分火鉢位ハ切るへられも此石を用ゆるり此絵の
風ちり形りたり実よ生石を示歳既を人示ことの形り
是軽想を作りり延の上り猪よ掛る焼掃(ハタキ)の形

のとりを以て掃うんとせ〜よ女夫数をあけく留めくり坂
ふ生のきは イナヲとて神を祭り社なりのく〜ぬり祈て
地を掃うんとせ〜形よ麦弦揚くも宏なりと幸若の中よ
を一節くり物四りる迄より風面も少〜穏ち形り社は出
船せんり弦夫人共く諸問とるふ此処より吉里余川を下りて
海辺て向ふの岸よ渡るるれとも生崎赤堅て風波落き
付ハ船繋きぬる強〜と形り余乃吉を吉迄共等を連る海の
容ると思よ出きり実よ夫人の言の如く風波あるくて喰
惡異るへ人の状なり此海艘夷の千島東沙鄙(カムサツカ)伽よ連り
たるよ〜形まくも暗よ癒るとのなく物凄き体なり片色



ナイフツ

海ちかくも
ちりはてぬ
名にもあるかな
あしのひとまろと
うけて海に
篤



武郎図

川の流れを見へ侍り此河原より鶴白鳥群居る様を
銃せんとせしに忽飛去れり又夫より小舟に乗り先川を下り
て彼の所にて彼きて夫より何にても船寄らざる時は別
途にて彼りあと美人とのをすすめ梅〳〵衛を過ぎる
船を出し侍り川幅壹里余下り海面に出る左りの方ナエラ
ツトウと云大なる沼あり海面に高波打寄河水激流して船
漂蕩を此所を横に切て向の岸に着んとすれども赤土の絶
壁にて岸せ附とも乗れ〳〵海岸より打寄たる結果乱を横に空
漂ふ〳〵衛く少し踏なる所へ船を寄へ〳〵皆〳〵船より始
て安心し侍り此切岸より奈技所にて数字を題せり

注此崖赤砂交りの土にて壹度この洪水に流れ流る如
よりく記しあふと雖共壹度を待候〳〵消失せん事を
とら何を記しあひ〳〵らん石〳〵〳〵貝年の果とも書のひ
ち〳〵〳〵と一筆も

夫より絶壁の土より衛くたひ土より壹度此所一面の草系にて松
の結果多し〳〵外致瑰質仲ハ花盛り四五丁行て流れて下りる
小流を木の橋にたるの影〳〵壹里半余りてアイ地名と云所の
夷人小屋に宿を

注此地一面の平地東向にして海岸白砂地にて歩行を悪
し家の後ろ船山ナイフツのトウキタイに続きたりて名

アイウシナイあるゝ今アイとのこゝ国をアイゝ尊麻の事ウシゝ多ーナイゝ沢あり此草爰の沢国ゝ多き故ゝ此名あるゝと思ふる

夷人名々タシトリと云余今朝ゝハーと云茅の根を入るゝ云米の粥をゝ赤小豆の入る粥を食せしゝ此夜後痛ーゝ大ゝ悩めり終霄ゆーゝ睫を交るゝ能はず然るに後君より賜ひしー正氣散をと用ひて曉方ゝゆーまゝ少るゝゝ有ゝ農程大ゝ延引せり

夷家ゝ厠もあーゝ竪てゝ粥ゝ燃ゝ火ゝ有ーゝ腹瀉ゝ子附ハ[illegible]ゝ雖ゝ[illegible]ゝ有り

廿六日今朝ハ晴ゝ四時過ゝ沢アイを出ゝ腹瀉して大ゝ氣力を損ーゝ食氣なゝれゝ生徒を出ゝ草京ゝ武丁して湯四ゝ出つ又武三丁ゝてアイベツと云小川を舟ゝて渡り武里程ゝてシルトロ地名夷家ゝ彩ゝて朝飯をゝ食ゝ今日ゝ土用ゝ暑氣ゝ催ふるゝ夫より小川所ゝみあり又五里程ゝてラタサン地名ゝあり ラタサンベツ舩渡ーゝを越て三丁程ゝて居村ゝ名ヲマシ子人名の家ゝ投宿ゝ

注此地も同ーゝ東向ゝ高浜ーゝてラタサンベツと云川あり其小岸梶楊枠（トヤナキバン）赤楊等の山際ゝ家居ゝラタゝ砂ゝサンゝ流ゝ出る儀此川筋石砂流ゝ出るゝ故ゝ此名ゝ号ゝ

此家余程廣く四間より五間も有るべし猟師あり奥氣(地名)
直養の書状を通達し有て高橋を斗をシラヽヲロより残し置
より四里程不絡俱よりトツリの峠を揮り経し即今西浦へ赴く
爾るに此日を暮を続し居を食ふ余八石使ふ
きはして白米を粥に煮て食せり此海岸ナイフツリが
シラヽヲロ迄て平瀬の沙場にてトヽの木又ハ椴夷松の樹多く
道より続し
廿七日朝より雨降るヨタサンを出小川を越武里余りてマ
トマナイ川拾間余夫より壱里半程てキトウシ夷家武軒
此辺を過ぎ大霧りして殆人も辨しこゝ此海猴の死

したるこの半身砂に埋まれたるを半ハ肉を切取り腹内
太サ四尺程のハ〇キトウシ地名夷家に慧を猟士より海猴の脾を
掛るに悪臭吹出て海猴の油を貯るに生形ち大
胡蘆の如し宅夷家鮫の切身を猟士より吊(フル)し乾ハ臭氣堪
難し武三丁過てホロナイ川(地名)四五間越て壱里半程て
ベケレイベツ(地名)川巾武三間夫より壱里半程小川武ツ三ツ越
てシラヽヲロに着て其入口よりシラヽヲロ川巾四五間あり此所山
ふ添て材料を求て後の山をイサラ(地名)ノホリと云イサラを元
たるものノボリと山のよし此山元壱る所あ五六町此ノボリ山の
奥行程海中より岩出るよ

注此地の地形則本文のごとし　生村の山の根にありて少し南
を愛らし生前一里の晴礁有て沼形をなし　たり地名シラ
ミ岩のヨロロ多産　儀なり

夷人の常食コロクニ　ヒロクニ　生ずる草の茎を乾貯置
き冬　鹹艸　煮て汁漬の油とす　一人食せば玄米五合
を用ひて粥とす　汁漬の油水鍋の油とす　一人食
を脂燭に用ひ　帆立貝を盛る此村人家凡十二三軒もあり
けるとも運上屋へ稼に行かれる甲斐なしとの人々皆老
人子供病者のみにして壮者は運上屋へ行き留守
居の女夷は懶惰なる甚しく　朝

起てもなほ火をふるのみにあり　煙の端にて烟草を喫するばかり
なり生産にまかせる女夷は男夷を信じ　たまに食事の支仕
をせぬなり小児は初めの時より弓矢を持て生れ出る所を先
能く教へ　弓紙地に倚て矢を張る術を人に教へ又
子供の用として此地の凡そ男子は右小刀左小刀の武挺を
腰に挿女子は左を挺を挿さしむ男子女子共に十四五丈也
前髪に エキシボと云へる紙捻あり

注エキシボと云ふ形の儀を考へ　此処武三ヶ所の内なり
山韮海の青玉を三四十計も三角形に糸にて本末
附是を前髪に下る玉極美きものなり

廿八日朝曇りたれども晴るゝ頃西の沢より出発し山の裾を巡り行くエナヲサキ（地名）シコマナイを越て元土屋生業なるてマーヌイ（地名）より直養に作る所にて泊りして余を待つ至る所にて残待業て今朝出立し今の径をマーヌイ川越海辺に出る沢なり毎と今みくりて遠沢なりしまた前路よりすこし深岡宮松岡等の書状を持る龍御吳今船を養へ暑くなりと両士は一昨夜ウエンコタン迄にて別れ別ヲロツコ人所在の地まて出るもんとの志あるゆへ余は是より東トツソの嶮を探んとの旅夷船に乗る

注マーヌイは濱形東向左りワアレ岬右シラヽヨロのエナヲ

サキとの間よりして一湾を成し生所マーヌイヘツと云あり其
南岸に家居し後ろに樹木生茂中に一ツの沼あり此沼
水の落口あり故に悪水のよし帰路西地へ越る所に此川
筋に入るあり川の壮岸七八丁ヨリハコタンと云処有て家
塚君の営まれし鹿島の社あり夷人等の願ひの削花(エナホ)と
深草中に立る所　皇国の御威稜と雖も此の形象と我
ここに生りけり

ワーレ岬絶壁奇景あり ホウコタンと云所夷小屋四五戸人
石狂夫より大なる岩あり クサレ子グと云夷小屋あり此処にて
マーヌイより海上九三里とふ志ち(ふしち)佛ふひ(ふつ)処のルシハ子人名

と云夷人と獨言して演説ひして彼よ為ふムシリと云雛
鳴あり て酷鮮居ること驚し五六丁ヨリて一ツの岩海中に聳へ
踏所也

注此獨言の夷人ハ何処と云岩ヲ居られとも知ること能ハズ
ナイの者あるの此地五丁計の高所にて右ヲウシユンヘシ
左ヲヲソエンコタンノチ岬ヨ對峙して一小湾を形ち安ヨリの
島あり後ろヨ樹木立茂る川あり生ル岸に家居を地
各々ナカツプウシナイの称りある亀し此地鸕鷀(ウミ)鷀(カモメ)ハ
及ひエトヒリカヒ地ハ多く集り生餌さ多の水鳥共の雛
島に巣に群れ居る故ヨ此名あるっチカツプと名付る也

ウシロを多くとつて城あり

夫より岩屋平と行る十間餘はなれて始くあれ[illegible]の屋より出る所此所よりノテカリマとつふ奇石あり岸に沿りてトツソの方側面を見る巔雲より隱見して見へたる余トツソの禁よりいまだくんとつよう知し潮滿く出路を失ひしと云ふ忘れて退くんとす余押くすに或ハ潮膝の上まで来り又ハ[illegible]石穴と潜り一岬を過れハまた先なる一岬有て潮こゝに絶て下余を経てトツソの禁る海岸ハ出る事ハ難きハ絶壁にて潮水深く一歩も進こかゝ[illegible]トツソ樹木生茂りて高山にて禁の方こゝ更余の所赤礁にて壹里余も有る一筋なる一條の瀑布あり二ヲイとの[illegible]の方

山の裾ハ海中へさし出る処ゑ所往見へ出り

注トツソ島東地方一の高山巔ハ奇嶽簇々として聳ひ立く其形ちリイシリに似たり俗て土人リイシリの婦山(メノコヤマ)と云ふ

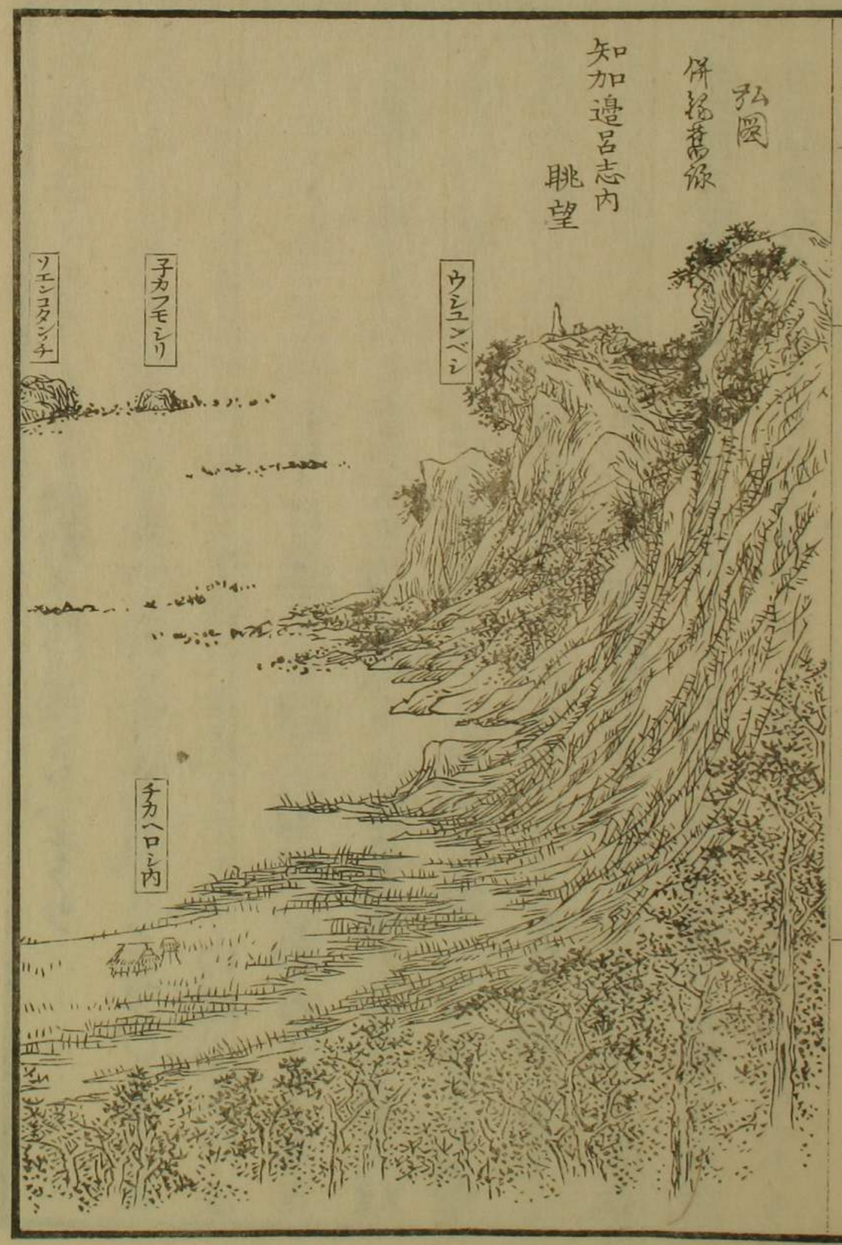
[illegible]リイシリも此記里計奥より接て彼地へ移[illegible]

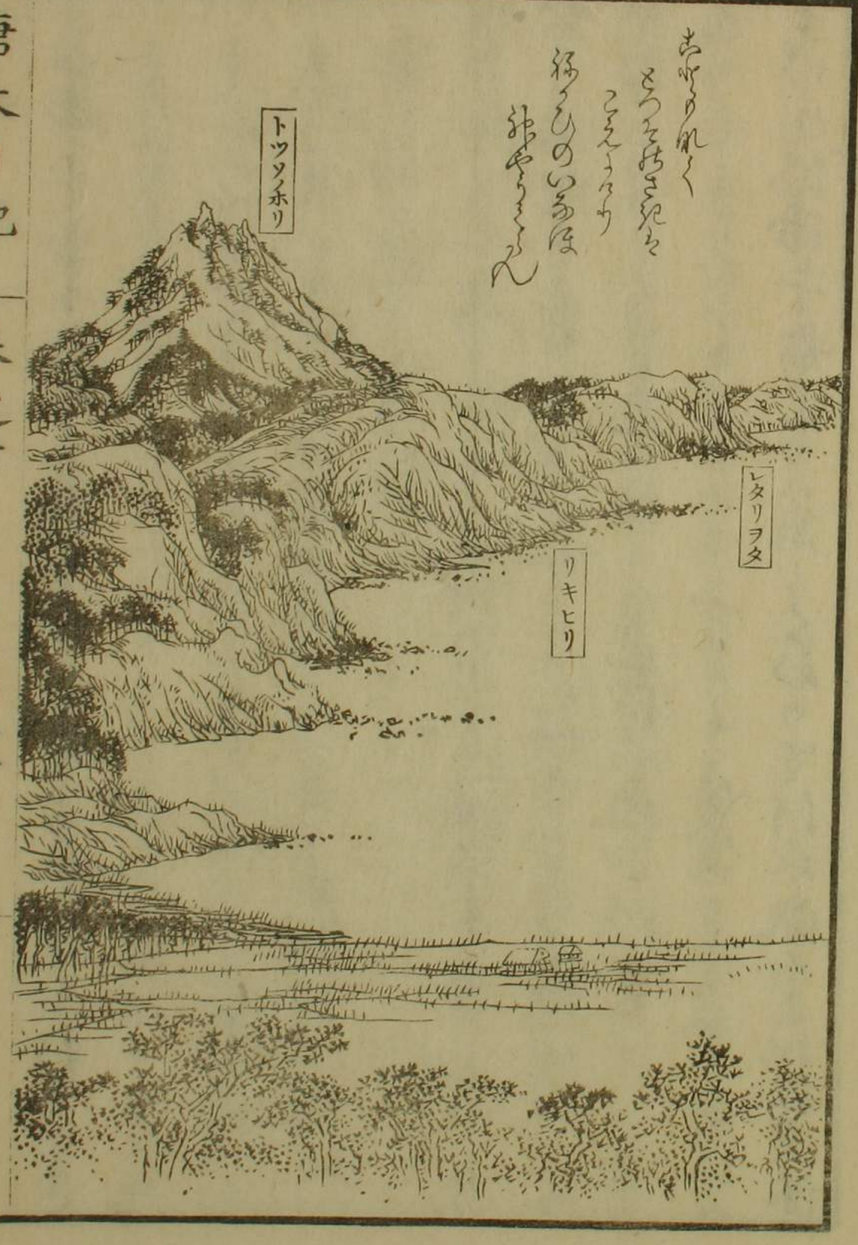
其接し跡とつふるの大なる沼あり成[illegible]山霊著しきゆへ往来の土人必ず此禁の字ノホリホ[illegible]云所へ船を寄せて前花(エナフ)を作りて祭り行[illegible]余チカヘロシナイより先の処ハ船を通りしゆへ何成所なるやを知[illegible]

岩穴とつふるハバツテレチシとつふ[illegible]穴の広さ拾[illegible]

の岩岬なるへしトノテカリマと云ふ[illegible]岩岬のおふあり

弘図
併絵巻像
知加邊呂志内
眺望





巨岩にて舟を船中より眺望せ〻る是より先ハ中〻行こうきまるハ一目ゆく〻眺〻うれかりそのトツソ〻ふハ此辺海〻そのたつ波の山ある〻ふ先生此辺にて乗りもつて奥を探らんとせ〻ものかしこ石書地名〻くハ是日記（ニッキ）清書（セイショ）の時てり思ひ過〻後〻あるし

余猶奇〻を探らんとするふ回行のその海路を失うんとをいたを属従を止むることを切にて引返すの実ハ潮水流れ来るを深〻あり〻るの景ハ信〻して岩根を穿ひ行ハ危きうの景あり辛ひしてチカベロシナイより〻ハ昼食〻又舟ハ乗り移り〻ふ風雨午前よりハあ〻〻ゆかして河水激せるれ船漂流

ゆく〻潮を打入る〻度ごとに波ハ高〻ふ海中ハ出〻ふ小浪あ〻きかるゆ船頭の夷人高〻ふ唱へ言ひ〻ふ聞かせて書附置ゆ

ツカヘルシナヱ（地名）　トマリヲロ（泊）　カムイ（神）　ヲロロリ（様の方ゑ）　トシヨフフノカムイ（山の神）

マトマイカムイ（松前殿様）　ウチノカモイ（同じ様の神様）　子タシユ（有故）　ウチカムイヱンカラツキ（見て居ゆ）　ラムラ（心ゆ）

ツケノ。　ヲマナンカ（ゆく）　トカンナカムイヲロワノ（それ〻〻神様たち）　子ヤカシニケタ（その上）　ヱンカラ（神様見て〻る）

ラムラツケノ（達者て）　ホツケタラノマ（暖日時節たち）　マナニ（向へ）　ワキ（着く）　ピリカ（よゆ）　シリンヤツテ（ほ天気）　アフト（雨も）

イシヤマノ（ちゆ）　シリ子クシユ（天気たち）　アシン（新しゆ）　ノカムイセ（神様）　ヱンホロリ（悪いるゆ〻）　ツキヒリカノ（ちゆ〻ゆ〻ゆ〻して下さる）

譯未〻尽さること思ふ

七ツ時前よりマースイヨ戻るより今日ハ迂き沢ゑ〻さる使晴よて演

急ぐ余程暑氣を催さるるとも綿入の胴（トウキ）長袖（ハンテンカワハ）切合羽拵まで
て日向を歩行たまとも汗もせず異候ものなり
廿九日朝晴るるマーヌイ川を船にて沿ひ行くに市街四五間も有
屋〻西岸樅の木林にて水も清冷なり尤右の屬地元武里余
りてナベア二地名と云処より此日今日も亦山路へかけ入るれハ例のアツシ
を着るる乃路傍の木に
是迄ハ山ひけ衣裳せるみ今日和歌を詠ぬ
注此所船を岡へ引上置是より陸路を無る所なり依て其名
あるこのナツプヤンゲなるへしと聞伝へ
やうく山路を分く出る此所ニユニヤ迄も劣（ヲト）らぬ難所なれども兼

て使者の通行有へき由なれハ直養夷人を命して草を苅しせ
ありとせ〻所通行為て形〻やうく又段もせ〻山を上り又沿よ
下り為こ度りてやうく山を発ち〻〻処にて休む此辺ケヨミウン地名
と云処に使者の為に仮小屋を掛さる由なれと余知らさる名れハ
寄て見さるさ是より十先土里半程にて夷人弟弐人来る
小屋ふ言語不通空義別に書る暫〻して豊吉蹄より来りて
彼弐人ハ西北迴尚の方より東地へ白米を出せるなり依てその内
五俵余分て知さるとて同行今宵より白米を食とへしとて喜
ふ又是蹄より来るとの先鱒の酢なるものを尾指ひ来れり是
を懶の所にて酢のこ食るく指るるなりと凡懶を魚の酢のこ食

あらく余も捨置よし魚を焼くといふ儀にや則肉を割て焚火にて
炙られ醤など附て余も貯へたる鮭味噌を附て食しけるに味甚
よろし此数は海辺に宿したまひしも魚不足にして食せし昨夜
漸く一腐を喰しそれとも鮮魚なる物なし今日も不図も類
のなき美味を嘗めたり又昨夜玄米にて醸したる白酒を持
来りて船の上り場にて夷人ともに寄喰けるにサーブ二と
余も縄絶して列にかけつらなりし所に業縫に入て持来れりサーブ
二と一遍に五六杯を傾て心地宜氣なり余少し嘗て試けるに
醴の簡なる様なれど少し其味何れとも酸き事甚し是より
小高き処を越行て元蔵里余と思ふ處又昨来直養の宿し

たる小屋掛にありて一宿せり
但按るに此処はカアマナイといへる所なるへし此宜敷の
都土人皆昔しより山越しの処にて此処に宿せる処なりと
晦日朝曇りたり是より余にて大木の倒れたる所に体も此木
夷人ともに木幣を立て祭る又鉄の矢の根数多く刺しあり是此
チトカンヌシとも云へり
但此樹数圍の大木形なりし故に千年余倒れしとや此辺り
の土人弓勢を試んと為に此木の精に向て数本の矢的とあやし
伺はかるときは生涯の猟獣に当るを射抜るといへると
云伝へて立願し皆試ことや今に其鏃多く刺たりチトと

射カンヌシとゝ唱り刺さる澤のよう形り同名トンナイ
チヤ越りまたはりまゝワーレの外北シヤリよりも子モロ越り
至際所ゝあるべし
此前後分水嶺あり夫より武里奈踏攀してクシユンナイの川上
字チベアチゝふよ出より此処より上川（ウエカハ）他一郎ゝ分岡ゼ抗あり余此
所ゝて樹を削ゝゼて
東涯探遍又西涯短褐孤節渉嶮奇嘗盡瘴嵐多少苦便
知我亦一男兒
此所より船弐艘と艘ゝたり是を直養ゝ命して出せ置ゝゝゝ
是より奥船ゝゝゝ人家ゝゝ船底やゝとすれハ沙ゝ猪して

傾ゝゝ度ゝあり壱艘の船ゝゝ荷物人夫とも乗移りて六人
漂行ゝたりゝより夫より厚岸極めて多くゝ二里余ありてクシ
ユンナイゝ着て
軽風一路棹漁船六月荒陬赤脱綿両岸幽禽弄嬌舌韶華
長駐九春川
此所夷家四五軒あれとも人家ハ大き軒のゝ家ゝ仮小屋を建
たり此番人を馬吉ゝゝ云上川ゝ従ひて奥地ポロコタン（地名）まて行
まゝ長吾川就作ゝ連ゝ迄項り有ゝたりゝゝあり此ゝてクシユンナイ
川落口ゝゝ拾間もあり又ライチシカ（地名）の川落口ゝ是ゝ三信ゝと
馬吉の物語り形ゝて

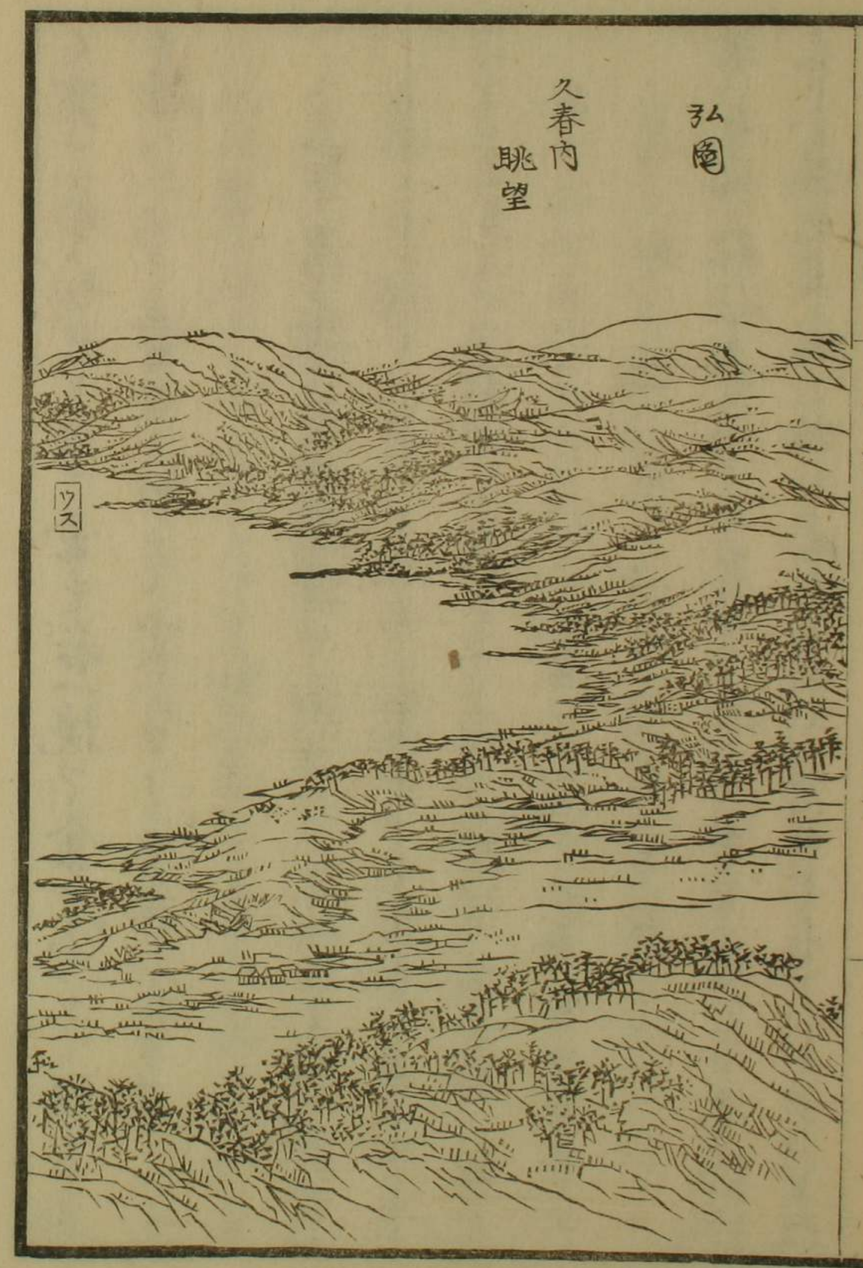
注此所西海呼平地ニ一條の川あり先生舟ニて下られ流地人家ハ川の南岸ニ沿ひ此処若干ウスのみ〜わるエンルカ有タクタクヘウシの岬對峙す〜く一小湾をなしたる故波浪穏ら故ニ此名あるクシユンゐ浪無ニと云儀なり

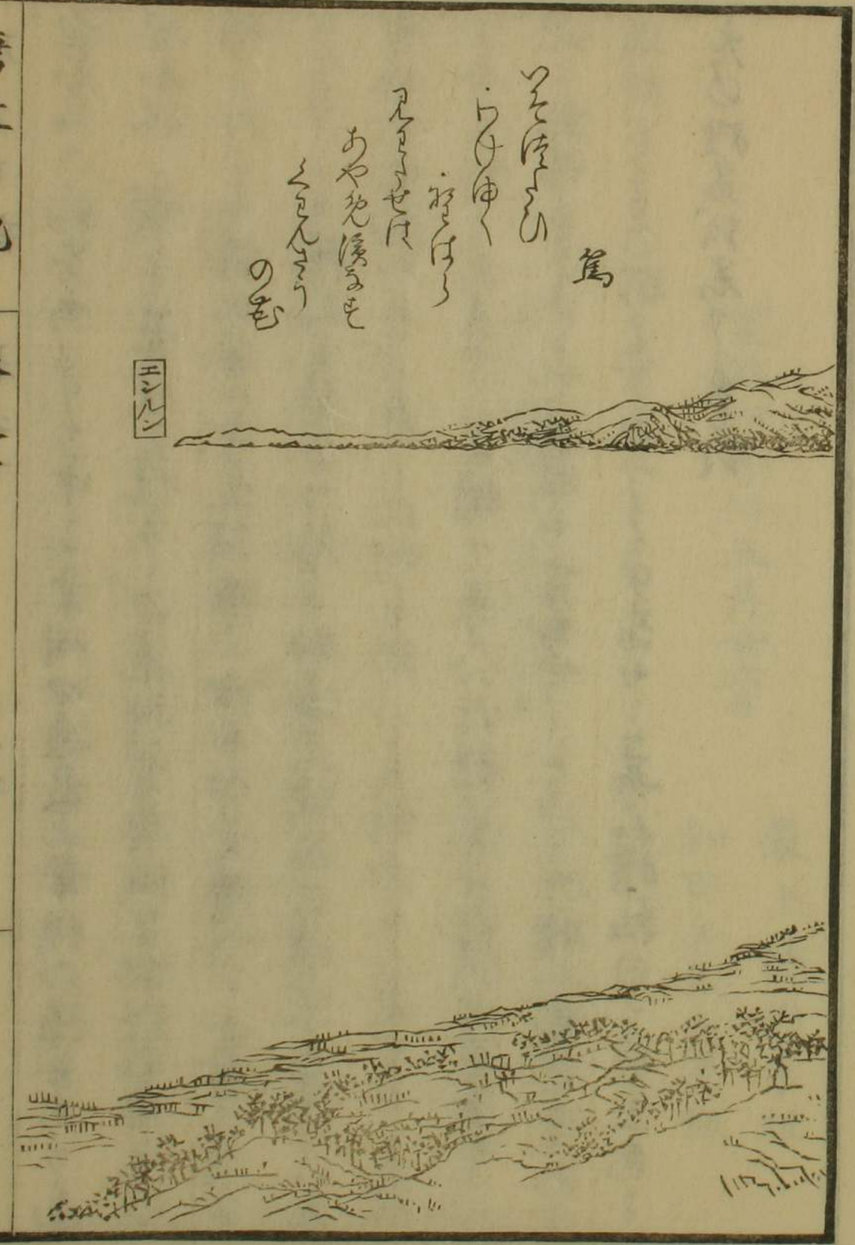
夫より宿泊ひ武里奈ニてナヨロニ著〜歯所乙名シトクランケ人名の家ニ泊す此シトクランケゐ楊忠貞ニ云へる者の實孫なり〜今日ハ直養ゐ縮ニて家ニ居ニ生妻なゐへ〜大鍋ニ鯨の切肉を入水ニて煮〜夫人共ニ振舞ひ給ひ婦ゐ端ニサアブニ人名ケトウシ人名トメカアイノ人名坐せり又此家ニ居る白髪の老人同く坐〜ケウシトクランゐ父なりの各海扇と称して作て来

く塗ゐ物ニ切身を盛て食ニ各一椀ニて食し終りて持て帰ひ〜ひ〜嘗試ひ〜ゐ〜嘗試ハ神ニて家ニ居て妻人迎き

注此島の例ニて出人ニても和人ニてと客行る村ハ何ニ云ゐ例く直ニ縮ニて著振舞ニと例ゐ〜五彩有る村ハ著ニ五彩ゐ一種ニて食物を持来ゐ饗せり生食ハ多分帆立貝ニ〜ハ来ニて小判形ニ長く脆ゐ〜ハ脆ゐ耳ニ持〜物ニ是を子マニ云へゐ〜ゐれて食ニ手ニて取ニて本文の如く〜ゐ神ニて拭ひ返〜洗ゐ〜ゐ古ニ云ゐ

妻ハ共ニ洗ひ〜て〜ゐ中ニ入ゐ〜ゐ貴賤の区ニシトクラン人名酒来ゐ余楊忠貞ゐ肴の物ゐ〜ゐ一見持ゐ度ゆ者を以て言ゐ


弘圀
久春内
眺望


篤

靈柩抵の物を出すの中より東附四通最上常短の添出あり為
要分異に載る管理之姓名の花押有唐紙半切程の滿文の
始より押すの端の方ハ印文消滅し次に印文漢へ文章滿字
にて半〻も殘ぬものあり外より或通ハ漢抵の漢文と滿字一色
有此外室物やうと尋しに何とも云揚忠兵衛墓のみを辱
より今ハ打ち忘れすと云總て夷人ハ亡魂のみ他人より言葉きは
大よ慈傷とるのみにて其時を言出せしものより償をもとめ有る
通辭とるの際を要すると甚ハ償抵のことの上色
方の姓名ハ為ち記

寛政四年壬子五月廿六日　最上徳内常短
和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日　小林源之助豊章
最上徳内常短

奉
旨賞赫哲來之佐領付勤琿等抵至德撈賞烏林
查得各處各姓哈賚達俱赴前來領賞惟陶姓哈
賚達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文劄
付領取似此情形寔非辦公之道耳聞西數大國

與陶姓人往来是面是以煩勞
貴官如遇陶姓人切尓曉諭令伊明年六月中旬
前来領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
故此特懇

賞烏林官　佐領付勒琿
雲騎尉凌善
防禦德僧尼

嘉慶廿三年夷則月十五
耳聞
両散大國原因並未知情吾未
大清大國恩賞烏林亦来者各官員以直驗者不
負自國故此頼一日来若有順使者此處原由一
竝分別稍来覩直須知寔荷
大清大國官員　拜純

此記通書書あらためるを無用の長物

此書を写しし

清用

此書付の写を訪て江戸表へ上覧に付

為御活字に成度事

カラフト島
ナヨロ住夷
ヤエンコロアイノ

此書に最上常雄の名見あり

注此処間成向沽浜形すこく超て海岸嚴岸多し元地一條
の川ありて其西岸より人家十余軒家居もナイヲロ也沢大き
ことふ俄なり

七月朔日　朝晴まくらウシトクラン人名この家ともに前の川と小舟にて
渡り浜辺より出るより是より壹里程赤土の切岸にて潮干より
東の所あり風波ふく通行絶て難渡のよし東よりしてヒヽヘツ
川を越シララロよりある此処夷小屋あり体も是より此所の土人
サンケアイノを案内とし拾所程にて カウマナイサシまで拾町も
通てマラナイ拾四丁を通てトマリヲロ此処川口巾弐十間程お
間きたる所なり夷家多し是より壹里余も行て奇巖多き処

より到る此辺海中小水豹多し 嗚呼と称する此処海中に岩出
たる大岩ありて路通せずして山へ上り又真下に下りたり是にて坂
路一條をおゆるり
注此島々を蝦夷と称する坂路に有りと云ふ此嗚呼にて
多し 俗て島夷基も彼水獺皮にて製せし皆と称く敷て
此皆を敷遠く為のこふあること坂路の用心なる土人
此路を知るる和人を信し又敷と時に天氣変り海荒る
よしいひ伝ふ
夫よりヲテツコロの岡元壹里余を穿へし奇なる瀑布(タキ)あり其
水嚴より出りて微塵を砕けて霧となり瀑布の形ちとなるよ

又流水巖より海り苔の之紀を作りり水程のゆく有るとう数像も
落あり ヲテツコロとつふ小川を渡りる所にて後ひ第るサアブ
二人名と女の子の後をさり遠く此辺より海岸浪打際をた
どり絶壁を作りひさ〳〵潮のとゝ紀より遠へハ全く潮るとゝあり大船
たる石浜を潜り抜く嶮石捉耳へ通路絶る所より此処をツウカイ
とつくるゝ此海中の岩より海猿一匹横りり卧るを超ゝ続せて
ふ中りれ引拓るゝれとも生ゝ海中へ軒ひ蔵て行方知れず
兎角する内日も暮れて雨も降出さり夫より絶壁を作ひ
宮るふゝの上流潺潺く草の丈ケ高くして嶮岨言語ゝも
あゝと嘶く山上より紀りり又沢より岩ひを越さるに又向ふゝ

大なる山あり難き大れとも途中所〳〵草根を取附枝を助り嘶く
遠紀より黒雲中を行深谷の内樹木の横りり所〳〵道絶陸へ
ゆ〳〵と方角を変せとけ迷ゝサンケアイ人名石猫先きはとゝみ
手捨とを前より建道を戻りあ迷絶能くすゝみて深林を経
分けすゝ行ふ此り数度して嘶こりり坂ふ好りたる所窮め
て難所にて流潺潺く去歩を失すれ忽ち深谷へ落る面き
拓るるり余寒にて疲憊拓ゝり進退窮し嘶く去と夷
人等ふ引ゝて第ゝ上を過り降りぬ辛苦して夜二更の況ゝも
有通し海辺へ出ゝり流ゝ来ゝ腸をうけ須臾島を作ふ夫分
壹武丁歩〳〵仮小屋より

注此所ハ〳〵くらホントマリとゝ此国ハ女の子ハ
セカチ　カナチ等也ハ通行いとゝ〻ハ敷ちゆうとゝ
ようハ凡八里半計と思ふる志ゆうの夜の宿ハ蔵
如此雑説なるゆへ不審なりゆうハ如ツウカイの
説へ輪を石ゝて雑説ハ此国ハ〻ハ〻ハ
るゝとトツソの峡をまゝとゝ奥深く探ゝんとの心を安石何
なるゆへ〻ゝ心此地彼方ハ比ゝ計ハ三分ハ一の雑説
もあるゝ

此度新ゝに作ゝるハ庭ゝて延園の作ゝて人ハ居ゝ何ゝ
ゝ〻唯史を賛ゝ〻ゝ志ゝる跡のゝ形ゆ皆ゝ業ゝ
ゝ

ゝせんと強儀ゝ此辺ハ蝦夷居住ゝ人の孔ゝ業ゝ先バイカラ
サムシ（地名）と云所ゝて夷住ゝ有ゝ此ゝ置ゝ事ゝ
ゝ也ゝ今青ハ呂岸ゝて夜ゝ
ゝる夷人ゝ踏ゝ来ゝ
ゝ山ゝ
入ゝ者ゝ
是ゝ砂糖のゝ
ゝ
振酒ゆ
此ゝ余ゝ

嘉隆ハ皆後まくらの絵はの病れるや皆〻蓙を被りて おれるを
とも余を戦ふの能つて火を出すを用ひて濡る衣を乾し又ハ
腹を〻脊を煖めたりと云サンケアイノ人名ハ少〻も横ふるもと
ちく壹人火を守り居らり夜半過る迄より本船を傳ひ岸蓙
を被りてうとまて打臥ぬ
二日暁夜より雨降続き壹り余疾病の所見えて又火を焚き
たるサンケアイノ人名ハ支度して薬を煎へ飲ませ明後
日まで人足の迎ひを待くと思ひ其精悍感ずべし夫より一睡
ちく朝五ツ時目覚て起るに雨ふり〻強く海上ハ発開する内
後ろより人足女のるとも遅くふ岩したり壹吉まより漕ぎ来る

皆〻食ふ昼ハ飯の代りに干飯の代りハ出とて其美味なりし夫より
家を出て浦辺を見壹吉重ハ味なりし所の方より帆船ハ見え
たり余二使者の船なるへしと思へとも問屋き人を形〻稍近
つきて見ると又武里余ハ味なりし海面絶四五丁余ハ漕ぎ
寄りて停望せしに彼船より也ハ此方を見招るなり余如何
とも無之を思ひ直ちに命じて空砲を数発放すり須臾
ちく彼船よりも壹砲を発ちらまてよりまて使者の船なる
と思ひ直ちに途中遮せられハ必ず加ふるものと思ひ行逢さんと漕
漕せしとも帆を掛て走る船いつ迄遅参つき目的なるし発ち角
思ひ煩〻ひく又壹里余ハ味なりし所妻人壹人出迎ふ此の

カモイトノチツフ（大船　船）ありやと問ふに頭つきたり夫より小川伝流ハイカシに著きり

注　爲ふ之ハ此所バイカラサムシかと思ふ本名ハイカルサンに成りて居りやや船番所一棟あり左傍に小川あり後ろ嶮しき岩壁地名ハイカルに春のヨサンに流れ下ること五俄此川著雪融すれば流るゝ所に此名起りしと思ふ

豐吉ハ蝦夷船に荷物を積余り先に此所に来り居る余に云かゝる船ハ昨夜ノタシヤム泊りして今朝出帆しゆくと聞て先の船の痕跡を得られ直養ハ昨夜ノタシヤムに泊りたる

ヤムに行西端にて事情を聞たり彼に余ハ僅に五六里の遠りてノタシヤム（地名）に出られ居りし遺憾いふばかり形し余義ふく河辛の志氏（河津平山）へ一書を出せり果して事情ハ直養猶したゝんとより人ハ唯寒嶋の嶮を探ゆしるの状況を聞て石演を出里程西てノタシヤムに著

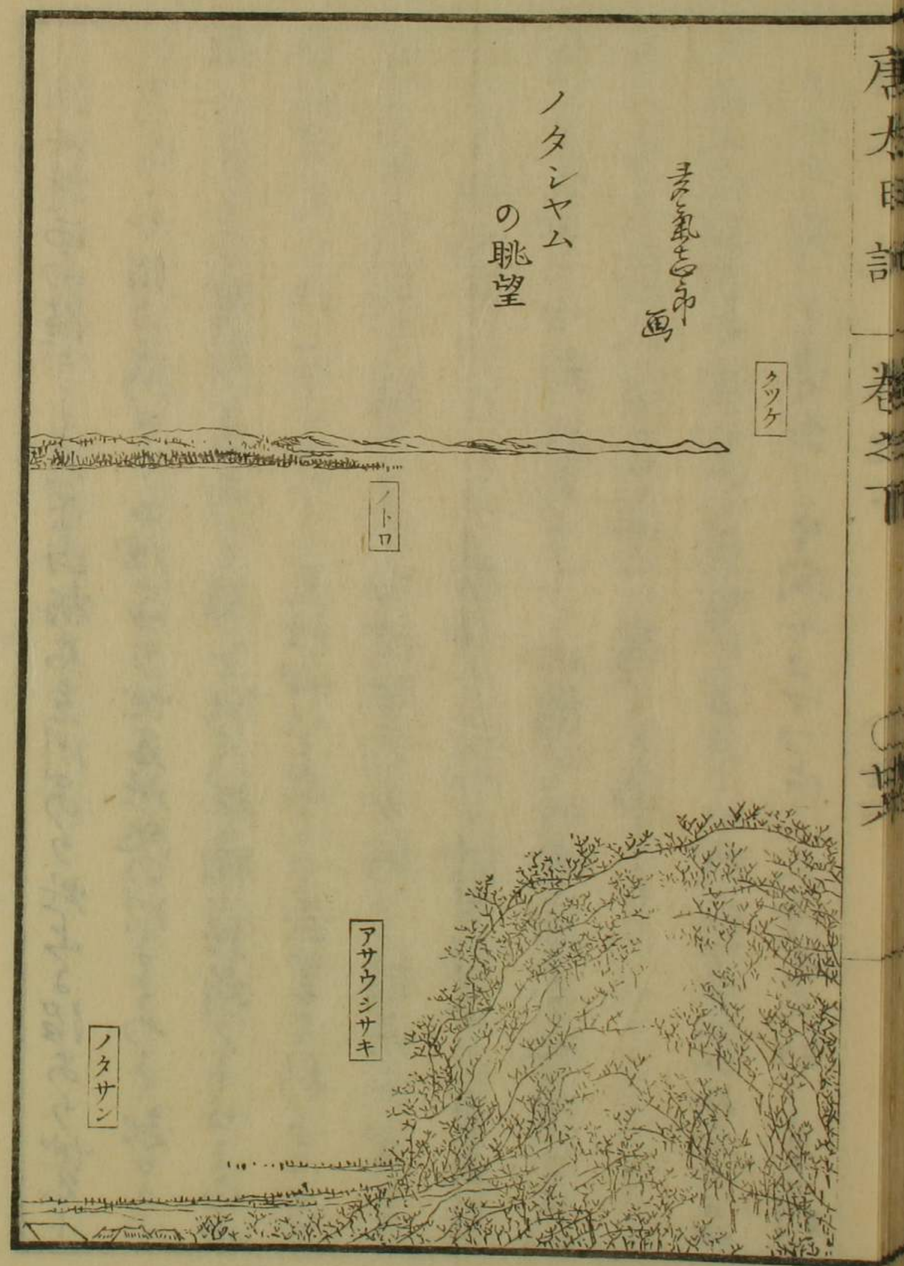
注此地西向小石演五六丁に連きたり右にアサウシマキ（岬）たりにホロヒラのサキ（峨）ことお對して遠ハ生間一小湾を赤し遠南にノトロの崎と申こと一條の川ありて此小岸に番屋一棟夷家五六軒を置に流しまゝ漁猟たり本名にヲタサンたる紙東地に同名あるを知いつとれくノタサンと當三

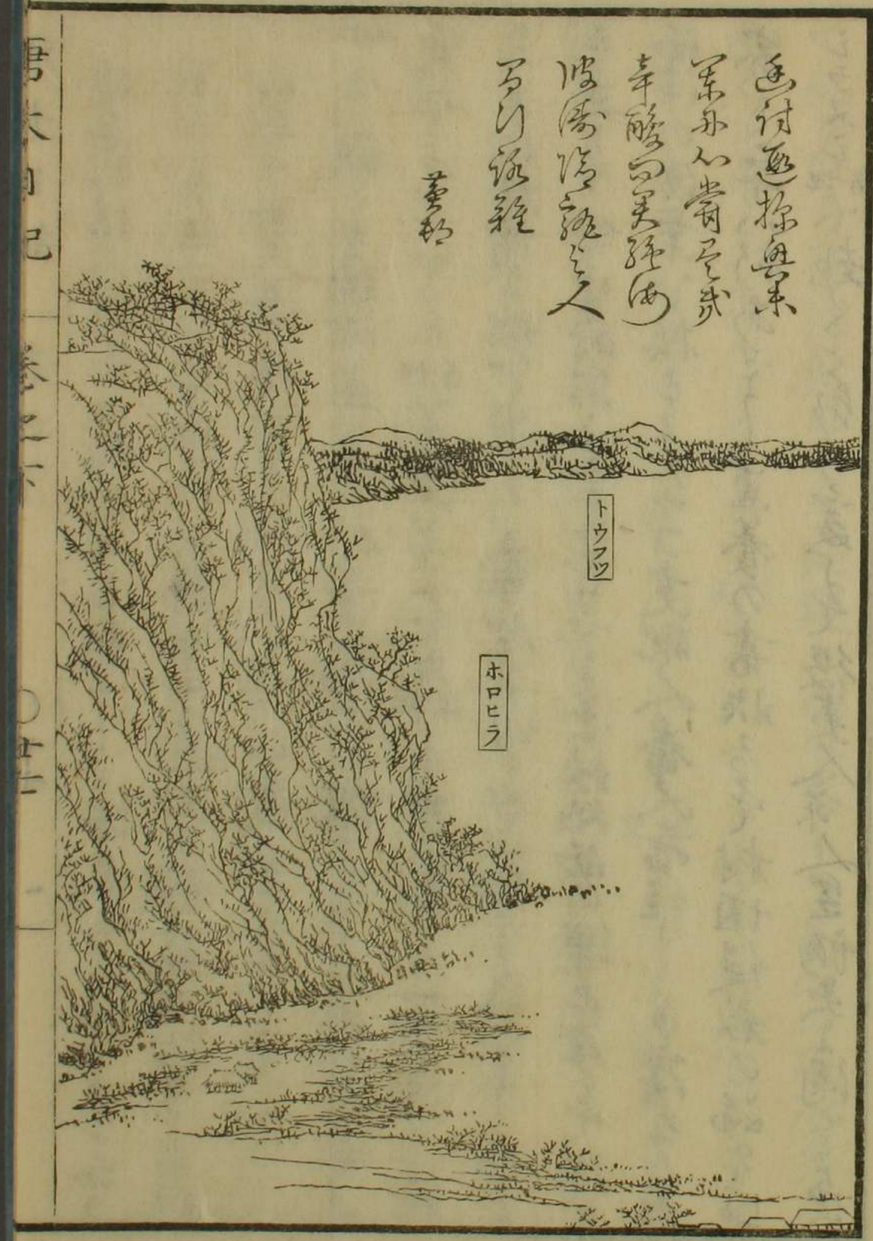
変わりしとぞや

明日まで使者の泊まりて府あり家にて村垣使君らエンルモコマフにて引返されし事なれば家に留まりて茶湯はさてさてと知れり家に通行家に留まりて茶湯はさてさてと知れり家に通行よりとりつかの余クシユンコタンと出てより十四日湯あらせされば是を喜び速に治まる此地にて此夜雷鳴あり

同三日朝雨晴れより歌舞あり今日海夷船を繋ぎ帆風強けれども海上穏なるあり武里茶にて小川あり トウブツを立つ夕方より上陸して明番所にて小憩す

注此所西向深うして茶山橋本之川あり此辺沼あり地名トウブツ沼の落口と云沼あり地名此処の川よりつく起る船を繋ぎて乗船の者出る磯を伝ひて同る此所ノトロとあり九武里余にはけ出るへしまた此岬と出て武里を行トコタンと書此変小山を後ろにして湾と成る形 後ろに小さき沼あり離場所のようにて番屋も六間に拾間程あり矢天乃社あり番屋も十軒程あり 也總て此辺六尺位より深くして海岸にて中間向番屋有の方ノトロ岬にてエンルンモコマフの岬對に実出て平岡モコマフ迄一大湾を形作り此


ノタレヤム
の眺望
クツケ
ノトロ
アサウシサキ
ノタサン


トウフツ
ホロヒラ

番屋の後ろ沼あり依て此名起りしと亦名ヲトウコタンあり
トウヲ沼コタンヲ処ろふ傍ろの其上ヨ擂盆（スリバチ）を伏さ置
山あり土人等是をまたリイシリの妻山ありと云
四日朝より雨降出れとも海上穏ろ故ろ康潭の前ハ
乗船してトマリホ（地名）を過てラクマカ（地名）ヨ迄ろ行より雨ろ降
者也此所ヨ船を寄ろく番屋ヨ休こて濡ろ衣とを干
さ夫より八ノ宮時分ヨエンルモコマヨ来此処西の運上屋として張て
西浦の漁業を指さるるより支配人番人居住しを度ろ夫
家も三十八軒あるよし直養の書状ろて村垣侵君の跡を追
シラヌシ（地名）へ越こと能ろ後て後夫人并人足婦夫ヨ酒を与へ

て此り迄の労役慰めろより此運上屋の窓より高山の頂を見ル
番人ヨ尋ろに夷人トウキタイ（地名）と云又メノコ山とも云此辺ろて
新ろ高き山ろて洋中より望ろはリイシリ（地名）ヨ似ろ故メノコの
稱ありと唱ル康潭の後ろの方ろ高ろ山あり
注此所西成ヨ向ひノトロ山對ひ尤ろ小しの岬あり是ろ西て
号しろエンルレろ沖の名ろ称ろコマフろ間と云俗ろ称一
名の暗礁あり二里間ヨ大船を繋く後ろの方ラカイノホリ
山名ホロノホリ名と云高山あり此間より南濱ルウタカの河上へ
越ろふよ流く運上屋為し合て弐拾余株夷家ヨ拾六軒
兵天社あり美し家建さろ

五日今日八朝より晴くり

注此間濃霧深き故に四季の景色も無りて時とて

も十月より一日もあるの好きこの所なるゆへ此モコマフ二四を前

後の処にて霧籠りより考るに敢て今日晴くるとふ

ものもなく此辺よりトコタンまでハ番屋数ヶ所あり人烟

を絶ることなれハ他て志るべくもなかるべし

是より乗船してヒロチ地名ヲホトマリ地名あるを行く何もこれも山の

裾にて夷家なれとも折開きたる処ハ見へたれとタナシトマリ地名と云

所より上陸しく昼飯をすませ番屋にて所見を賦しきり

處々黄第倚翠微草深古徑没柴扉拠湾沙岸衝波瘦繞舎

溪流經雨肥窗小唯看山半截江平相映鳥雙飛漁村午静

閑無事一縷炊煙人未歸

注此地溪形西向小石魚多く後ろの方ハ山麓本モコマ

フより六里半陸行の止宿所なる処なり番屋漁小屋

等あり夷家むらハあり今モコマフより引取て志賀も不任

夫より又舟より乗りて七ツ時前トコンホより着て此処ハ番屋

も多くあり

注此所西向素濱左りウエンヒラと云山の岬右ヲタライチ

地名と云一條の砂岬對峙して一小湾を形し川あり其南

岸番屋一棟板くら弟より夷家志賀あり中の方十余里に

トヽシマを眺こ風景いとゝ方形し

六日暁夜半過より雨降出し暁の過より晴るゝ前濱より乗
船し海上数十里ホトヽシマ（地名）ナアボ（地名）マツナ
シ（地名）を過て八ツ時過モイレトマリ（地名）より若干今日強風せし所も
昨日の路のごとく皆山の稀のごとく平地少し歩行き出る処あり此番屋にて帆立貝を焼の肴より用ひた
ゞ風風なるゆえの事

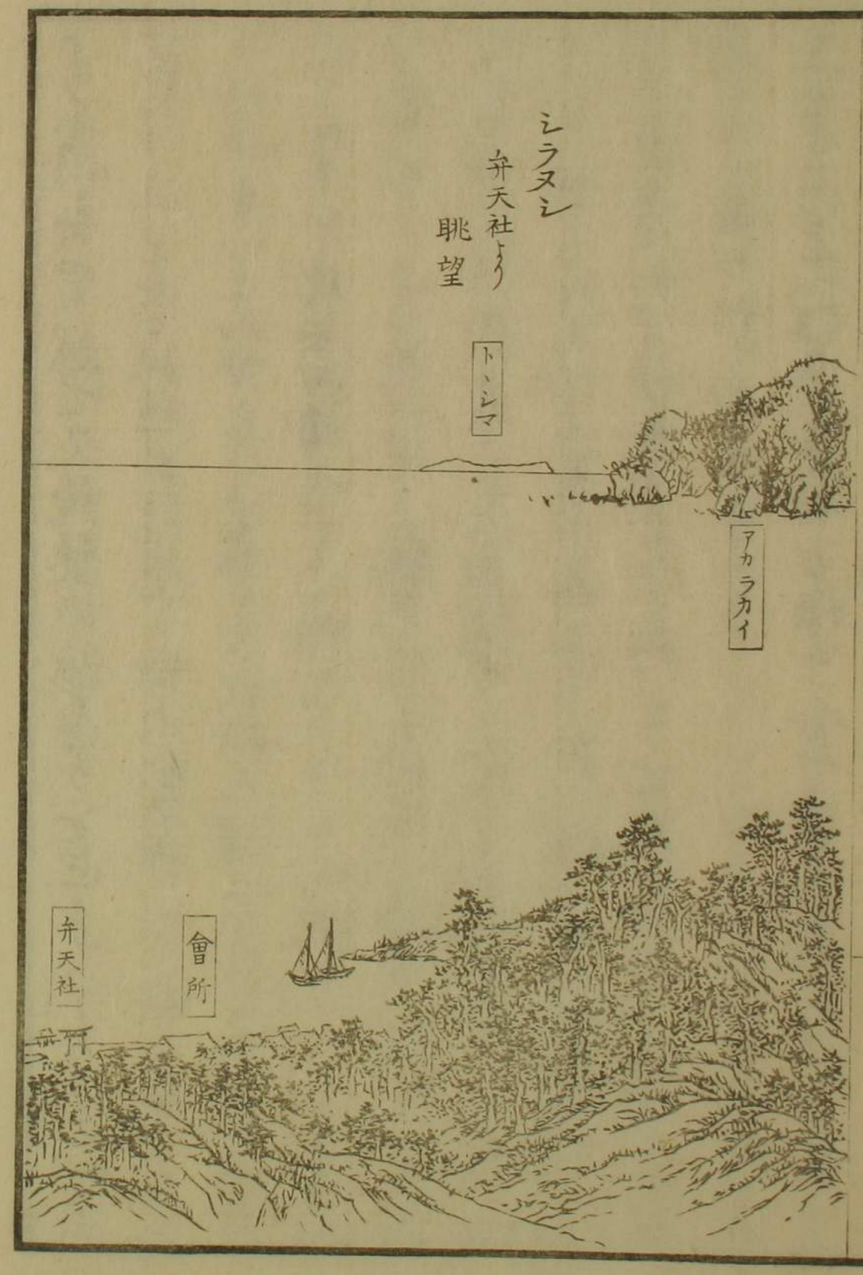
注此処本文のごとく山の稀なし歩行し処より番屋あり余も
ゆえ止宿を注所西向すゝくトヽシマと對しゆう此島を
全海積なきゆえ此名付ゆえこと生周廻七里ゆえ此処海上

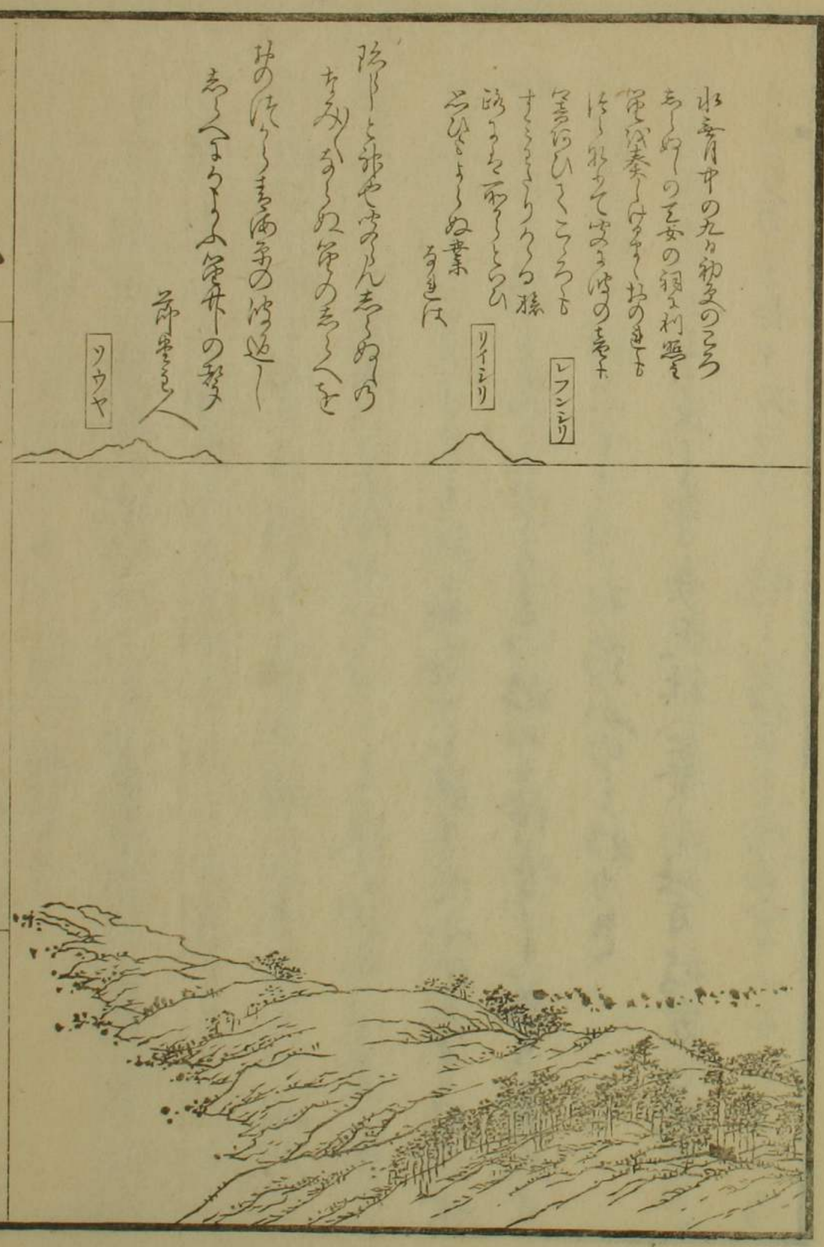
七里有ゆえ又当所の地名モイレを休トマリを船澗と云
儀なりトコンホより七里餘あり

七日終日雨今朝い荷物を船積して余を陸行し昨日
ゆえ モイレトマリよりシヨウニ（地名）ゆえ九拾里余の百姓家
を野宿なし中ゆえ山を遠く歩行き出る処も山を過て小海
掛を渡し小川所ゆえあり何を歩行ゆえ何
いつ処ゆえ小雨なれども雨中風強く陸を食をしき所も
なし俗て生ずゆえ起行せゆえシヤウニ（地名）のみ手前より海所より
遥て遠見られい屋根のゆえ岩あり是をウエンチシ（地名）と
いふウエンを忘ゆえチユシを注ゆえ此岩海へ岩出て

海少し巖ヶ日に船を入るゝ事ならさる故に此称ありし也岩の
裾凹ミたる所を越て七つ時過ショウニ〔地名〕に宿る
此濱形西向下は小石にして後ろの方嶮しくたゞ高山相並ひ
左りヤエンシユホ〔地名〕右ウエンチナシ〔地名〕並ひ突出しく其間弐里許
の間一小湾をなしぬ又未の方にリイシリ〔地名〕を
見渡景いはん方なし止宿所一棟并に夷家二軒ありモエ
レトマリより九十里あり
八日　朝より小雨今日も陸行にてショウニ〔地名〕を出て直に屏風の
如く成る絶壁に依り海岸にさしかゝりて道無きを少し陸の方切
岸を攀上りて廣き原を四五丁過て又々海濱に出る是

より小川三つ四つ越て又絶壁の裾無りを廻りてアカラカ〔地名〕と云
高山の裾を廻る此辺大絶壁に嶺夷松の磯馴て斜に繁りたる
さま奇景いはん方なし夫より大なる磯を過て大なる瀑布
弐ヶ所あり甚壮観にて始て見たる大瀧なり巾九尺間
も有へし壱ヶ所は少し狭けれとも弐所に落るを実に奇観
といふへし此処を過りて岩の少しもて屋のごとくなりたる
下に小憩せし此石窟に燕の巣あり夷人探りて燕の雛三つを
得たり巣は取たる羽毛もて作られいかにもことの処へさせたる
夫より廣きをおりて壱里半余にてシラヌシ〔地名〕に着き村垣使君
直養等にも見へ昨日の辛苦を語り合て皆々喜悦を賀し


シラヌシ
弁天社より
眺望
トヽシマ
アカラカイ
弁天社
會所


レフンシリ
リイシリ
ソウヤ

百姓一人を捕夷人も酒を与へて労を慰さむ
さて〳〵夷人共も愚直小児の如くにして憂とすべきものなり数日
の間行きみ〳〵も物乞ひ出るものあり〳〵老婆ありて別に
号数を作りもとくみ弱なりて侮るふもあり〳〵此地人の
家よりても食用の手助けなとして家人の如く余り懇意
なるサーフニアイノも訓良なるものにて小川あるを以て余
を頼みて渡を出し〳〵サし〳〵もいわる体なり若き夷人共
の戯を強く拒絶なとも唯打笑ふのみなりき
詳去歳夏余シラヌシなる矣天社に養し紫彼方と眺望する
ふかの方ヨリアカラカイ嶺と称へ南の方ふらノトロ乃

岬海中へ突出し一抹の雲と紛るる来の方ヨリイシリレ
フンシリ海の中央に青沢流るゆと後ろの方雑樹茂集た
る中に御ら白きものゝ見ゆるを何と問へは夷人等カリンハニ
のイフイケと答へらり是樱花にて此地五六月の頃今
を盛りと開くなりとて先生の一句春詩潭の弁天社に
さけのしり〳〵かゝりたを思ひ出し日記のそこに書附る
今志〳〵ぬの国を繋し〳〵偖せて出るふ志〳〵ものの
此巻の壁尾に形ちのあ理

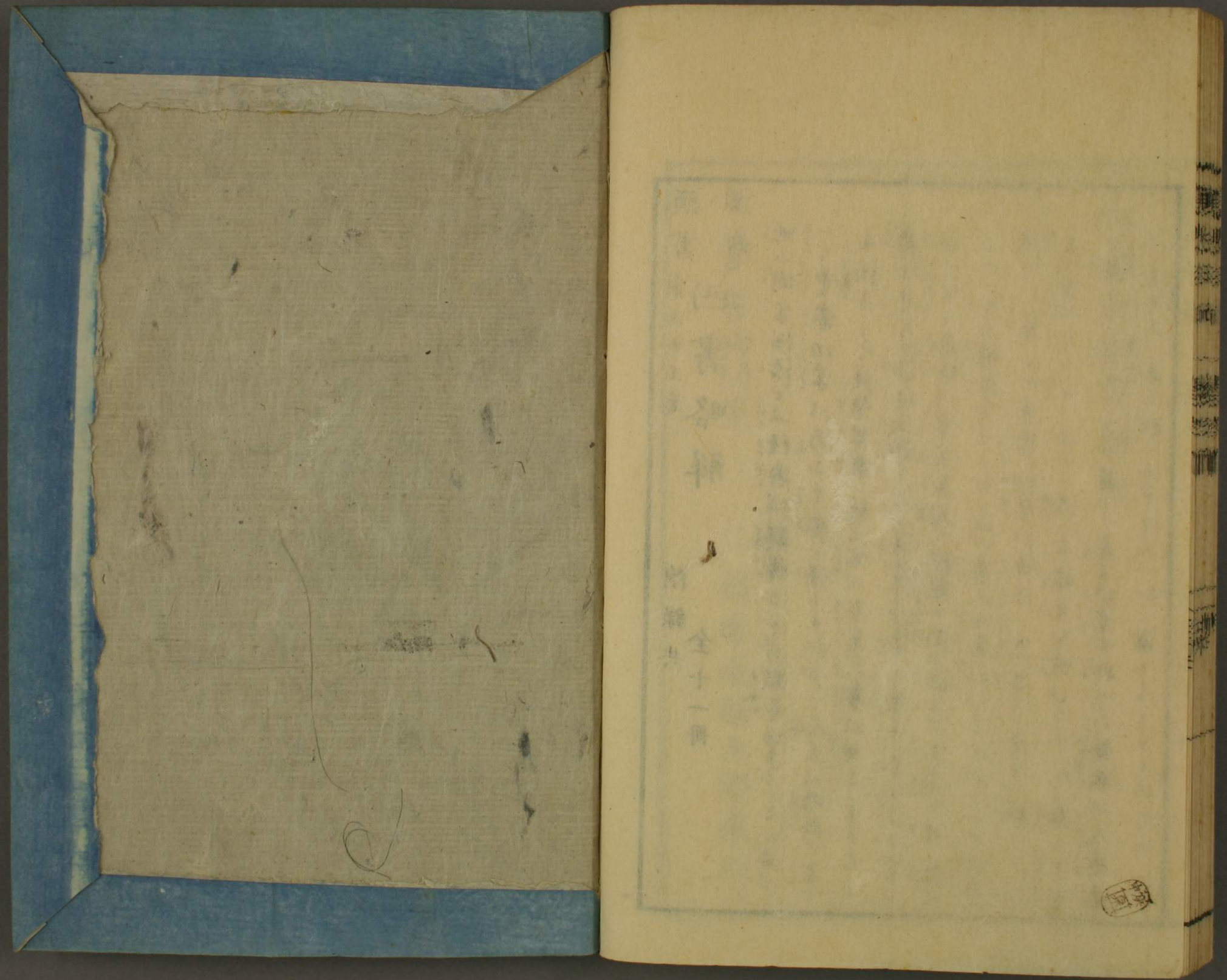
一枝紅艶弄嬌柔六月初旬香正稠夷虜何須詢國境此
苍開慶是　皇州

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月發兌

江戸書物問屋　日本橋通北十軒店　播磨屋勝五郎藏版

頭書　蘭溪先生著

圖解　四書略解　附録共　全十一冊

世ふ國字俗語を以て經典の解釋をなすの教本ひまどもいとまなく
一も童蒙初学ふ為ふまを要と為るふ今の略解の書ハ
云約ふして能聖賢教へ給ふ本旨大要を明ふもるふと
勝と文えて規く物語もるふ実なるを上層ふハ本文ふ主字と
注を写ふ為ふ時ふ宮室器物の類審ふ写と画さて云と以て解し難き
その一目ふ瞭然るふしむるれバ実ふ四来ふ行ふ人ふ天地懸
隔せ一事ふて本学初学ふ者子一段容易さ見まバ則ふ道
義ふ発明もるふハ云人ふ及ぶを遠義と試ひるふと雖も益
と得ることあらざる能しふ有ふ山書の如きハ海内の人童蒙
乃ちふ一本と給へらまもんバひる能ふらざるものなり